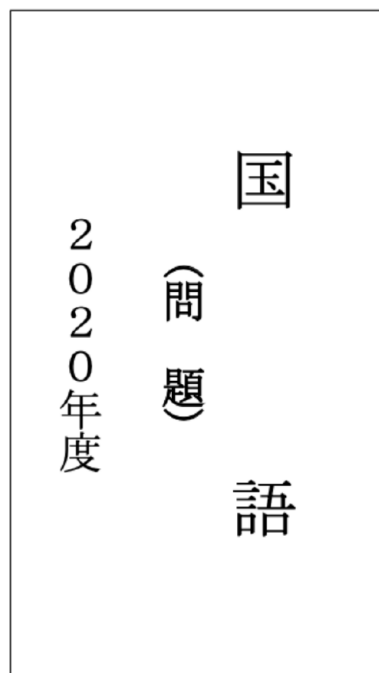




〈R02142016〉

注 意 事 項

- 1 試験開始の指示があるまで、問題冊子および解答用紙には手を触れないこと。
- 2 問題は2～9ページに記載されている。試験中に問題冊子の印刷不鮮明、ページの落丁・乱丁及び解答用紙の汚損等に気付いた場合は、手を挙げて監督員に知らせること。
- 3 解答はすべて、HBの黒鉛筆またはHBのシャープペンシルで記入すること。
- 4 マーク解答用紙記入上の注意

- (1) 印刷されている受験番号が、自分の受験番号と一致していることを確認したうえで、氏名欄に氏名を記入すること。
- (2) マーク欄にははつきりとマークすること。また、訂正する場合は、消しゴムで丁寧に、消し残しがないようによく消すこと。

マークする時	マークを消す時
● 良い	○ 良い
● 悪い	○ 悪い
○ 悪い	○ 悪い

5 記述解答用紙記入上の注意

- (1) 記述解答用紙の所定欄(2カ所)に、氏名および受験番号を正確に丁寧に記入すること。
- (2) 所定欄以外に受験番号・氏名を記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- (3) 受験番号の記入にあたっては、次の数字見本にしたがい、読みやすいように、正確に丁寧に記入すること。

数字見本	0	1	2	3	4	5	6	7	8	9
------	---	---	---	---	---	---	---	---	---	---

- (4) 受験番号は右詰めで記入し、余白が生じる場合でも受験番号の前に「0」を記入しないこと。

(例) 3 8 2 5 番

↓

万	千	百	十	一
	3	8	2	5

- 6 解答はすべて所定の解答欄に記入すること。所定欄以外に何かを記入した解答用紙は採点の対象外となる場合がある。
- 7 試験終了の指示が出たら、すぐに解答をやめ、筆記用具を置き解答用紙を裏返しにすること。
- 8 いかなる場合でも、解答用紙は必ず提出すること。
- 9 試験終了後、問題冊子は持ち帰ること。

一 次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

推論のプロセスとしては、一般に次のA～Cのタイプが考えられる。

A. 論理的な推論

B. (注) 語用論的な推論

C. 主観的・飛躍的な推論

この種の推論のうち、Aの論理的な推論のプロセスの一種としては、次のような形式論理学における三段論法の推論のプロセスが考えられる。

(1) (大前提) …人間は死ぬ運命にある。

(小前提) …ソクラテスは人間である。

(結論) ↓ソクラテスは死ぬ運命にある。

この三段論法では、大前提（人間は死ぬ運命にある）と小前提（ソクラテスは人間である）の命題が真であるならば、この二つの前提から必然的に結論（ソクラテスは死ぬ運命にある）が真であることが **I** に推論される。この種の推論は、論理的な推論の典型例である。

これに対し、Bの語用論的な推論の例としては、(2)、(3)にみられるような間接的な発話行為、会話の含意に関わる推論が挙げられる。

(2) P…ほら、ドアが開いたままになっているよ。

↓Q…そのドアを閉めなさい。

(3) P…今日は遠足の日なのに、土砂降りだ。こんな幸せな日はない。

↓Q…こんなにひどい日はない。

これらの例を文脈抜きでみた場合、1 Pの発話からQが論理的に推論されるとは限らない。(1)の三段論法における **I** な推論と比べた場合、(2)のPの発話からQへの推論は、文脈に関係なく成立はしない点で論理的な推論ではない。しかし発話文脈によつては、Pの発話からQへの推論が可能な場合もあり得る。この点で、(2)のタイプの推論は、語用論的な推論の一種とみなすことができる。

基本的に同様の点は、(3)のPからQへの推論に関しても当てはまる。(3)の場合も、Pの発話から文脈抜きでQが推論されるとは限らない。たとえば、Pの発話者が変わり者で、土砂降りの日の遠足をとて喜んで人ならば、この発話は文字通り、この土砂降りの日を喜んでいる発話と解することも不可能ではない。(厳密には、このような状況もあり得る。)しかし常識的には、このPのタイプの発話は、Qのような **a** ジギヤク的なアイロニー（ないしは皮肉）を意図した発話と解することが可能である。したがって、この種のPからQへの推論は、(1)にみられるような論理的な推論ではないが、文脈によつては **b** ユウイン可能な語用論的な推論の一種とみなすことができる。

次の発話どうか。

(4) P…あつ、庭が濡れている。

↓Q…雨が降ったんだ。

(4)のPからQへの推論は、自然界の因果関係に関わる一般常識からみるならば、自然な推論の一種である。日常生活において、普通われわれは雨が降れば庭が濡れると速断する。しかしこの種の推論は、文脈抜きで成立するわけではない。このタイプの推論が正しくない状況はいくらでも考えられる。たとえば、家に飼っている犬が庭におしっこをした場合、あるいは誰かが前もって庭に水をまいていた、というような犬況はいくらでもあり得る。

したがって、(4) のタイプの推論は、(1) のタイプの論理的な推論ではなく、語用論的な推論の一種とみなされる。さらに言えば、(4) のタイプの推論は、いわゆる「発見的」推論という語用論的な推論の典型例と言える。

この種の推論は、(1) の例にみられるような、いわゆる三段論法の **I** な推論と比較するとよく理解できる。以下の図は、それぞれのプロセスを形式化したものである。

(1) のタイプ	
$P \rightarrow Q$	
P	
Q	

(4) のタイプ	
$P \rightarrow Q$	
Q	
P	(! ?)

I 推論の場合には、大前提が $P \rightarrow Q$ で小前提が P であるから、 Q は帰結として必然的に推論される。これに対し発見的推論の場合は、大前提は **I** 推論と同じく $P \rightarrow Q$ であるが、小前提は Q であり、この二つの前提からは必然的に P が帰結として推論される保証はない。上の (4) の発話は、発見的な推論に基づいている。

(4) の発話には、大前提 ($P \rightarrow Q$) は明示的には表されていないが、この発話者の背景的な知識としては、この前提は存在する。それを命題の形で表現するならば、大前提 ($P \therefore$ 「雨が降れば」 $\rightarrow Q \therefore$ 「庭が濡れる」) ということになる。(4) の発話の最初の文には、この後件の Q の部分 (「庭が濡れる」) だけが表現されているが、この Q の部分が、発話の前提として与えられるならば、発話者が背景的な知識としてもっている上記の大前提 ($P \therefore$ 「雨が降れば」 $\rightarrow Q \therefore$ 「庭が濡れる」) との関係で、その原因は、「雨が降った」からではないかと推論するのは自然である。しかし、この種の推論は、雨だけが庭が濡れる必然的な原因とは限らないという点で、**II**、語用論的な推論の一種ということになる。換言するならば、この種の推論は、与えられた結果 (ないしは事実) から、その原因を探っていく (見つけようとする) 推論であるという点で、「発見的」な推論の一種ということができる。

一般に、自然科学において、結果として与えられた自然現象の背後に存在する法則を見つけていこうとする科学者の仮説構築の推論プロセスには、基本的にこの種の発見的な推論のプロセスが関わっている。

形式論理学における **I** な推論 (狭義の論理的な推論) と間接的な発話行為、会話の含意に関わる語用論的推論、**II** な推論の一種である発見的な推論の諸相を考察した。これらの推論のうち、形式論理学の中核を成す **I** な推論は、文脈、場面、背景的な知識、等に関係なく、前提から帰結への推論に至り、この推論が真理条件的に妥当であるという点で、形式論理の世界において閉じている。この点で、この種の推論は、非・語用論的な推論の一種として位置づけられる。

これに対し、間接的な発話行為、会話の含意に関わる語用論的推論、**II** な推論の一種である発見的な推論は、文脈、場面、背景的な知識、等に関わる要因との関連で推論の妥当性が問題になる。この点で、この種の推論は、語用論的な推論の一種とみなすことができる。

形式論理を特徴づける **I** 推論は、論理的に矛盾しない客観的な推論として定式化が可能である。この点で、この種の推論には主観的な認知プロセスは関わっていない。これに対し、語用論的推論は、文脈、場面、背景的な知識や推論する主体の思い込み、読み込み、等が関係する点で、厳密には主観的で飛躍的な推論の一種と行うことができる。人間が行う推論の中には、これまでにみた語用論的な推論以外にも、さまざまな主観的な推論が存在する。その中でも、古論理的と呼ばれる推論は、非常に興味深い。この論理に基づく推論は、木村敏氏の論文が指摘する次のような例にみられる。

(5) (前提1) …あのインディアンは速く走る。

(前提2) …牡鹿は速く走る。

(結論) …あのインディアンは牡鹿である。

木村は、この種の推論は、統合失調症の人たちにみられる思考様式の一つであるとし、次のように述べている。「この思考様式の特徴は私たちの合理的思考が主語的個物の同一性に着目するのとはちがって、まず述語的属性（「速く走る」）に着目して、ここから主語的個物の同一（「あのインディアンは牡鹿である」）を帰結するという点にある。」

同様の指摘は、ベイトソンの次の例にもみられる。ベイトソンは、この種の推論を、逸脱三段論法と呼んでいる。

（6）（前提1）…その人は死ぬ。

（前提2）…草は死ぬ。

（結論）…III。

この種の推論は、一見したところ、形式論理学の三段論法と同じ推論形式にみえるが、両者は本質的に異なる。

形式論理の三段論法の例（「人間は死ぬ運命にある。ソクラテスは人間である。したがって、ソクラテスは死ぬ運命にある」）で考えてみよう。この場合、大前提の主語の人間の集合は、この文の述語が指示する死ぬ運命にある存在の集合に包摂される関係にある。また、小前提の主語のソクラテスは、この文の述語が指示する人間の集合に包摂される関係にある。したがって推移性の論理関係により、小前提の主語（ソクラテス）は、大前提の死ぬ運命にある存在の集合に包摂されるという推論が成立することになる。この点で、形式論理学のIな三段論法の推論は、二つの前提の主語のIV関係に基づく推論とみなすことができる。

これに対し、上記の（5）、（6）の例にみられる古論理（ないしは逸脱三段論法）の推論は、Vいわゆる西洋的な形式論理とは異なる非論理的な推論ということになる。（5）の場合、前提1のインディアンが速く走り、前提2の牡鹿が速く走るという述語の同一性に基づいて、このインディアンが牡鹿と同一であると結論づけられている。（6）の場合も同様である。一般的、常識的な世界では、もちろん、インディアンは牡鹿ではない以上、この種の推論はきわめて主観的で飛躍的な推論の一種ということになる。

しかし、この種の推論が主観的であり客観的な世界を反映する論理的世界から逸脱した推論であるという見方は、必ずしも健全な見方とは言えない。人間の思考、判断の創造性の観点からみるならば、この種の推論の能力が、言葉の創造性、意味の世界の創造性において重要な役割をになっている。たとえば、メタファーの世界では、この種の推論は人間の思考、判断の創造性の基盤になっている。

この点は、上の（5）の古論理（ないしは逸脱三段論法）の推論に関わる例を、メタファーの創造との関連で考察した場合に明らかになる。たとえば、あるインディアンが平原を目を見張るようなスピードで疾走している光景に、ソウグウし、このインディアンの疾走する姿を、感動的な言葉で表現する状況を考えてみよう。このような状況に対する表現はいろいろ考えられるが、（7）のような表現が可能である。

（7）あのインディアンは、速く走っている！ あのインディアンは、まさに牡鹿だ！

（7）の例で注目すべき点は、メタファー表現になっている文（「あのインディアンは、まさに牡鹿だ！」）である。このメタファー表現の創造には、古論理（ないしは逸脱三段論法）の推論の基盤になっている（現実にはカテゴリーが異なる存在に対する）同一化の認知プロセスが関わっている。

一般にメタファーの創造には、「見立て」の認知プロセス（すなわち、ある存在を現実にはカテゴリーが異なる他の存在に見立てる認知プロセス）が関わっているが、この認知プロセスは、古論理（ないしは逸脱三段論法）の推論におけるVIによって可能となる。

（山梨正明『修辭的表現論』による）

（注）語用論…人が言葉などの記号をどう使ってコミュニケーションをするかを考える議論。

問一 傍線部 a c の片仮名を漢字（楷書）で解答欄に記せ。

問二 傍線部 1「P の発話から Q が論理的に推論されるとは限らない」とはどのようなことか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ P の発話は、問題のドアを閉めるように命令している発話として解釈することがふつうである。しかし、そのためには、必ずしも P の文自体の解釈において、論理的な推論が必要であるとは限らない。

ロ P の発話は、問題のドアが開いたままになっている状況を文字通りに発話している、と解することも可能で、それを伝えることでそのドアを閉めるように命令している発話として解釈しなければならないという論理的必然性があるとは限らない。

ハ P の発話は、問題のドアが開いたままになっている状況を相手に伝えるという発話であり、そうした意味として解釈することがふつうである。しかし、そのためには必ずしも P の文自体の解釈において論理的な推論が必要であるとは限らない。

ニ P の発話は、問題のドアを閉めるように命令している発話としても、開いたままになっている状況を文字通りに発話している文としても、解釈することはできない。発話された文の解釈を推論しなければならないという論理的必然性があるとは限らない。

問三 空欄 I および空欄 II に入るものとして、最も適切な組み合わせを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ I 演繹的 II 非演繹的 ロ I 形式的 II 客観的

ハ I 主観的 II 客観的 ニ I 主観的 II 形式的

問四 空欄 III に入る文として、最も適切なものを五字以上十字以内で解答欄に記せ（句読点は含まない）。

問五 空欄 IV に入れるのに最も適当な語句（漢字二文字）を本文中から抜き出し、解答欄に記せ。

問六 空欄 V に入る内容として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 二つの前提の主語の同一性に基づく客観的な推論であり、

ロ 二つの前提の主語の同一性に基づく主観的な推論であり、

ハ 二つの前提の述語の同一性に基づく客観的な推論であり、

ニ 二つの前提の述語の同一性に基づく主観的な推論であり、

問七 空欄 VI に入る言葉として最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 述語による差異化のプロセス

ロ 発見的推論による同定のプロセス

ハ 異なる対象の同定のプロセス

ニ 創造性による差異化のプロセス

問八

本文の趣旨に合うものとして最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 古論理の推論のプロセスは、形式論理の観点からは異常と言わざるをえないが、日常言語の意味の創造性と修辭性を可能とする人間の認知能力の重要な一面を反映している。

ロ 形式論理を特徴づける論理的必然性による推論には、主語における包含関係を推論する点で、主観的な認知プロセスが関わっていると言える。

ハ 語用論的推論は、文脈、場面、背景的な知識等が関係するが、述語における同一性をもとにした推論とは違う点で、主観的な推論ではない。

ニ 形式論理における推論も古論理における推論も、人間の創造的な認知能力の重要な側面を反映するものであり、合理的論理としての重要性を持つ。

問九

4つの設問からなる○×2択式のアンケート調査を行い、参加者全員が全ての設問に答えたところ、命題Aから命題Cが真であることが明らかになった。このとき確実に成立するといえるものはどれか。次の中から最も適切なものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

命題A…設問1に○をつけた人は、設問2にも○をつけた。

命題B…設問3に○をつけた人は、設問1にも○をつけた。

命題C…設問2に○をつけた人は、設問4にも○をつけた。

イ 設問4に○をつけた人は、設問3に○をつけた。

ロ 設問4に○をつけなかった人は、設問3に○をつけなかった。

ハ 設問3に○をつけなかった人は、設問1に○をつけなかった。

ニ 設問2に○をつけた人は、設問3に○をつけた。

ホ 設問3に○をつけなかった人は、設問4に○をつけなかった。

問十

本文によれば、問九のような推論は、どのような推論と言えるか。最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 論理的な推論

ロ 語用論的な推論

ハ 主観的・飛躍的な推論

ニ 右のいずれでもない別の推論

次の文章を読んで、あとの問いに答えよ。

今は昔、播磨守為家といふ人あり。それが内、¹させる事もなき侍あり。字、さたとなんいひけるを、例の名をば呼ばずして、主も傍輩も、たゞ、「さた」とのみ呼びける。さしたる事はなけれども、まめにつかはれて、年ごろになりにければ、あやしの郡の収納などせさせければ、喜びて、その郡に行きて郡司のもとにやどりにけり。なすべき物の沙汰などいひ沙汰して、四五日ばかりありてのぼりぬ。

この郡司がもとに、京よりうかれて、人にすかされて来たりける。^a女房のありけるを、いとおしがりて養ひをきて、物縫はせなどつかひければ、さやうの事なども心得てしければ、あはれるものに思ひて置きたりけるを、此さに従者がいふやう、「郡司が家に、京の女房といふ^b者の、かたちよく髪長きがさぶらふを、隠し据ゑて、殿にも知らせ奉らで、置きてさぶらふぞ」と語りければ、「ねたき事かな。わ男、かしこにありし時はいはで、²こゝにてかくいふはにくき事也」といひければ、「そのおはしましゝかたはらに、^c切りかけの侍しをへだてゝ、それがあなたにさぶらひしかば、知らせ給ひたるらんとこそ思ひ給へしか」といへば、「このたびはしばし行かじと思ひつるを、いとま申して、とく行きて、その女房かなしうせん」といひけり。

さて、二三日ばかりありて、為家に、「沙汰すべき事どものさぶらひしを、沙汰しして参りて候し也。いとま給はりてまからん」といひければ、「事を沙汰ししては、何せんに上りけるぞ。とく行けかし」といひければ、喜びて下りけり。行き着きけるまゝに、^dとかくの事もいはず、もとより見馴れなどしたらんにてだに、うとからん程は、さやはあるべき、従者などにせんやうに、着たりける³水干のあやしげなりけるが、ほころびたえたるを、切りかけの上より投げ越して、高やかに、「これがほころび、縫ひておこせよ」といひければ、程もなく投げ返したりければ、「物縫はせ事さすと聞くが、げに、とく縫ひてをこせたる女人かな」と、^I声してほめて、取りて見るに、ほころびをば縫はで、^(注)陸奥国紙の文を、そのほころびのもとに結びつけて、投げ返したるなりけり。あやしと思ひて、ひろげて見れば、かく書きたり。

われが身は竹の林にあらねどもさたがころもをぬぎかくる哉

と書きたるを見て、あはれなりと思ひ知らん事こそなからめ、見るまゝに大きに腹を立てて、「目つぶれたる女人かな。ほころび縫ひにやりたれば、ほころびのたえたる所をば見だにえ見つけずして、「さたの」とこそいふべきに、かけまくもかしこき守殿だにも、まだこそ、^eこゝらの年月ころ、⁴まだ、しか召さね。なぞ、わ女め、「さたが」といふべき事か。この女人に物ならはさん」といひて、よにあさましき所をさへ、「なにせん、かせん」とのりのろひければ、女房は物もおぼえずして泣きけり。腹立ちちらして、郡司をさへのりて、「いで、これ申して、事にあはせん」といひければ、郡司も、「⁵よしなき人

をあはれみて置きて、その徳には、果ては勘当かぶるにこそあなれ」といひければ、かたぐ、女おそろしうわびしく思ひけり。

かく腹立ちしかりて、帰りのぼりて、侍にて「やすからぬ事こそあれ。物もおぼえぬくさり女に、かなしういはれたる。かうの殿だに「さた」とこそ召せ。此女め、^{II}」といふべきゆへやは」と、たゞ腹立ちに腹立てば、聞く人どもえ心得ざりけり。「さて、いかなる事をせられて、かくはいふぞ」と問へば、「聞き給へよ。申さん。かやうの事は、誰も同じ心に守殿にも申し給へ。さて、君たちの名だてにもあり」といひて、ありのまゝの事を語りければ、「さて／＼」といひて、笑ふ者もあり、にくがる者もおほかり。女をばみないとおしがり、やさしがりけり。これを為家聞きて、前によびて問ひければ、「我がうれへなりにたり」と悦びて、ことごとくしく伸びあがりていひければ、よく聞きて後、そのおのこをば追ひ出してけり。女をばいとおしがりて、物とらせなどしけり。

(『宇治拾遺物語』による)

(注) 陸奥国紙：陸奥(東北地方)産の和紙。厚みのある上質の紙で、手紙などに用いた。

問十一 傍線部1「させる事もなき」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 命令をきく事のない
- ロ 決まった用事のない
- ハ さほどの家柄でもない
- ニ 従順という程でもない
- ホ たいしたことない

問十二 傍線部 2「こゝにてかくいふは」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 殿にも知らせずにいたことを明かす
- ロ 為家についてとやかくと文句を言う
- ハ 郡司の家が隠していたことを言う
- ニ 京に帰ってからそのようなことを言う
- ホ 女のひそかな教養についてもらす

問十三 傍線部 3「水干の」の「の」と文法的に同じものとして、最も適切なものを傍線部 a～eの中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- a 女房の
- b 者の
- c 切りかけの
- d とかくの
- e こゝらの

問十四 空欄 I に入るべき言葉として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ まめやかなる
- ロ あららかなる
- ハ うらかなる
- ニ いとほしげなる
- ホ ねたましげなる

問十五 傍線部 4「まだ、しか召さね」の意味として、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ まだ、どうしてか私をお呼びにはならない
- ロ まだ、そうした御用で私をお召しにはならない
- ハ まだ、そのように私をお召しにはならない
- ニ まだ、そのように私をお呼びにはならない
- ホ まだ、私のことをお呼びにはならないようだ

問十六 傍線部 5「よしなき人」とは本文中の誰のことを指すか、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 郡司
- ロ 守殿
- ハ 女
- ニ さた
- ホ 従者

問十七 空欄 II に入れるのに最も適切な語句（ひらがな三文字）を本文中から抜き出し、解答欄に記せ。

問十八 本文の内容に合うものとして最も適切なものを一つ選び、解答欄にマークせよ。

- イ 「さた」は自分の心の持ち方によって身を滅ぼした。
- ロ 為家は無礼な行爲を行った女に罰を与えた。
- ハ 郡司のもとの女の粗野な振る舞いを笑う者も多かった。
- ニ 「さた」は主人と同じように名を呼ばれたことを怒った。
- ホ 郡司は「さた」の言い分に大いに腹を立てた。

三

次の漢文は、仏教の輪廻思想について論じたものである。これを読んで、あとの問いに答えよ。
(なお、訓点を省いた箇所がある。)

形体雖^モ死^{スト}、精神猶^ホ存^ス。人生在^{ルヤ}世^ニ、望^{メバ}於^ニ後身^ヲ似^{タリ}不^{ルニ}相属^セ。及^{ベバ}

其没^ノ後^ニ、則^チ与^ニ前身^一似^{タルコト}猶^ホ二老^ホ少¹一耳。世有^ニ魂^リ神^ニ、示^コ現^シ夢

想^ニ、或降^{イハ}童^リ妾^ニ、或感^{イハ}妻^ジ孥^ビ求^キ索^シ飲食^ヲ、徴^コ須^{スルコト}福^ヲ祐^タ、亦^タ為^ス不^レ少^{カラ}

矣。今人貧賤疾苦^{アレバ}、莫²不怨尤^ニ前世不修功業^ヲ。以^テ此^ヲ而

論^{ゼバ}、安可^{ンゾ}不^レ為^レ之^ニ作^ラ地^ヲ乎。夫有^{ルハ}二子孫^一、自^{ツカラ}是^レ天地間^ノ一蒼生^{ソウセイ}

耳。何預^ソ二身^ノ事^ニ。而^{レドモ}乃^チ愛護^{シテ}、遺^{サン}其基址^ノ。況³於^ニ己之神爽^ニ、頓^ニ

欲^{センヤ}棄^{テント}之^ヲ哉。凡^ハ夫蒙蔽^{シテ}、不^レ見^ニ未^ラ来^一。故言^ニ彼^ノ生^ト与^レ今^ニ非^{ズト}一^ニ体^一

耳。若有^シ二天^{リテ}眼^一、鑑^{ミレバ}二其^ノ念念^ニ随^{ヒテ}滅^シ、生生^{ルニ}不^レ断^エ、豈^ニ可^{ンゾ}不^レ怖^ル畏^セ一^ニ耶。

〔『顔氏家訓』帰心第十六による〕

(注) 童妾…召使いと妾。 妻孥…妻子。 徴須…もとめること。 蒼生…民草。

天眼…天人の眼。人々の生死を知ることができる。

怨尤…うらみとがめること。

問十九 空欄 1 に入る最も適切な漢字二字を次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 未来 ロ 子孫 ハ 長短 ニ 朝夕 ホ 天地

問二十 傍線部 2 「莫不怨尤前世不修功業。」に返り点を付ける場合、最も適切なものを次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ 莫^レ不^三怨^コ尤^一前世^一不^レ修^ニ功業^一。

ロ 莫^レ不^二怨^尤一^一前世^一不^レ修^ニ功業^一。

ハ 莫^レ不^三怨^コ尤^一前世^一不^レ修^ニ功業^一。

ニ 莫^レ不^二怨^尤一^一前世^一不^レ修^ニ功業^一。

ホ 莫^下不^三怨^コ尤^一前世^一不^レ修^ニ功業^一。

問二十一 傍線部 3 「況³於^ニ己之神爽^ニ、頓^ニ欲^レ棄^レ之^ヲ。」の趣旨として最も適切なものを、本文の内容をふまえて次の中から一つ選び、解答欄にマークせよ。

イ なぜ自分の心から、直ちに子孫の来世のための基礎となるものを捨ててしまうことがあろうか。
ロ ましてや自分自身の精神に関して、直ちに来世の基盤となるものを捨てようとするであろうか。
ハ ましてや自分の心の中で、すぐに妻子などの近親者の事を忘れ去ってしまうと思うだろうか。
ニ 言うまでも無く、自分の精神については、すぐさま来世への基盤を捨て去ろうとするであろうか。
ホ なおさら自分の子孫らについて、直ちに愛護することを止め、忘れてしまおうとするだろうか。

〔以下 余白〕